

牧田諦亮監・落合俊典編

七寺古逸經典研究叢書 第一卷

中國撰述經典 (其之一)

大東出版社

新學社
PDG

The Long Hidden Scriptures
of
Nanatsu-dera, Research Series.
Volume 1.

SCRIPTURES COMPOSED IN CHINA
Volume I.

Editor in Chief

MAKITA TAIRYŌ

Managing Editor

OCHIAI TOSHINORI

DAITŌ Publishing House, TOKYO
1994



Copyright 1994

Editor in Chief Makita Tairyō,

Managing Editor Ochiai Toshinori

Published by DAITŌ Publishing House, TOKYO

Printed in Japan ¥16,000

©1994



如是我聞一特佛在香華國大城中城中央
有樹樹名伏樂枝葉四布周匝覆四十里花
葉冬夏茂盛有七寶華一者黃金二者白銀
三者琉璃四者水精五者珊瑚六者車渠七
者馬怒其寶大如瓶其味甘如密樹下夏日
則清涼冬日則和暘其樹華冬憂花夏有研
檀之香故名之為香華國國王姓瞿曇名阿
耶致阿耶致為人端正白錫聰明智慧少
為人常好布施奉持戒身口意克化不常
瞋怒心常歡喜施行十善有大慈大悲祇護
國中一切人民四等一心平等无異王為佛
於伏樂雷華樹下立大精舍置七寶架之座
與大眾比丘八万四千人菩薩七万二千人
辟支佛五万人阿羅漢十二万人阿那含二
十四万人斯陀含四十八万人須陀洹九十
六万人諸釋梵天王及諸人民鬼神龍鬼軼
數皆共來大會

尔時有高明賢者長者子三十億人見佛與
諸大眾俱聚會伏樂精舍中三千億人皆大

丘七方二千菩薩及諸緣覺阿羅漢作禮
還為居士比丘作禮復還為太子阿遮王比
丘作禮作禮訖佛便興大眾俱各各現神足
變化能在虛空中去太子阿遮王比丘見佛神
現足去便踴躍大歡喜身輕即能飛行又
復現神足能在虛空中發意千二百五十比丘
見其師太子阿遮王比丘現神足遂佛俱排
側重空中飛行皆復踴躍歡喜各各言我師
得佛威神力各各一心言我曹今之當復遂
我師隨佛飛行即各自動身身皆輕舉便
起飛行之復排側於虛空中佛皆以威神接
之是時文王國中公卿百官吏民八百億人及
太子阿遮王國中公卿百官吏民三百億人
并十二小國公卿百官吏民合百億那由
梵釋天王鬼神龍見佛現大變化莫不踴
躍歡喜諸比丘眾皆各各遙為佛作禮

毗羅三昧經卷下

在清水寺以法勝會于六月

如二條

七寺藏佛說毘羅三昧經卷下 卷末部分

叢書出版に寄せて

七寺住職 蟹江良三

この度七寺古逸經典研究叢書の第一巻が愈々上梓されることとなり、本叢書の出版に向け三年有餘に亘って研究・解讀に取組んで來られた著者・編者の先生方のご苦勞をしのび誠に欣懷に堪えません。

七寺は奈良朝時代の後明天平七年（七三五）に僧行基により開創され、創建當時は正覺院と號していましたが、七歳で病没した我が子光麿の菩提の爲に父河内權守紀是廣が七堂伽藍を建立したという故事により、七寺と呼稱されるに至った尾張の古刹であります。

この七寺に早逝の愛娘の菩提の爲に父尾張權守大中臣朝臣安長が願王となり、廣く豪筆の士に書寫させて治承三年（一一七八）七寺に奉納した一切經が、今に傳わる重要文化財「七寺一切經」であり、四、九五四巻が三十一合の唐櫃に納められてあります。

尤もこの巻数が明らかにされたのは、昭和三十九年から三ヶ年に亘って行われた文化財保護委員會の學術調査の結果によるものであり、明治三十三年四月七日の舊國寶指定當初から指定書には「唐櫃入一切經」としか記されておりませんでした。

今回の叢書發刊に至る最初の糸口とは、華頂短期大學の落合俊典先生が平成二年四月に、七寺一切經の中に數十點の古逸經典を發見されたことにもよるのですが、その陰には前述の昭和三十九年からの文部省の學術調査により纏められた『史料尾張七寺一切經目録』があったことを特記しておかねばなりません。

當時この學術調査に携わり盡力された先生方は、文部省文化財保護委員會の主任文化財調査官・近藤喜博博士をはじめ文化財調査官・財津永次氏、文部技官・山本信吉（現・奈良國立博物館長）、並びに文部技官・大山仁快氏等であり、愛知縣及び名古屋市の助成を得て七寺一切經保存會から昭和四十三年三月に七百部を限定出版し、公共圖書館を始め宗門系大學圖書館等に寄贈されておりました。

世紀の大発見といっても過言でない今回の発見の発端となったのは、偶々御自身の學問研究でこの目録の頁をめぐっていた落合先生が、幻の經典と言われる『毘羅三昧經』、『度梵志經』、『清淨法行經』等のほか十數卷の孤本、稀覯本に類するものがあるのに氣付き照會をとって來られたことによるのです。連絡を受けた當山では經典リストの電送を求めて經藏の一切經の總點檢をし、リストの經典の全ての存在を確認した上で、京都から落合先生及び中國佛敎史學の權威牧田諦亮博士（元京都大學教授）を招き、兩先生により紛れもない幻の經典であることが確認されました。

幻の經典の存在が確認されるや、直ちに華頂短期大學の中に、牧田諦亮博士と落合俊典先生を中心に、日本はもとよりイタリヤ、中國、臺灣、韓國、アメリカ等數十名の内外の學者グループを網羅したプロジェクトチームが結成され、「七寺古逸經典研究會」として發足、研究討議をする態勢が整えられ、これ迄既に第七次に及ぶ七寺現地調査を重ねながら研究解讀を進める傍ら、マイクローリダー化も同時に進められております。

經典の内容に關しては夫々専門の先生方が、叢書の中で詳らかにされておりますのでここでは敢えて言及しません。が、ともかく大中臣朝臣安長によって一切經が七寺に奉納されて以來幾多の變遷と度々重なる天災や戦火をかくぐりながら、八百餘年に亘る長い歳月を先徳の竝々ならぬ努力とこれを取巻く人々の善意によって無事に受け繼がれて來たのみならず、その學術的な價值と内容が次々とベールを脱ぎ、鮮明にされてまいりましたことに大きな感動と深い感慨を禁じ得ません。

70
597721

ただ残念に憶うことは、第五次七寺調査まで熱心に研究を続けながら、この一大事業に元氣に参畫された佛教大學、京都産業大學講師の石橋成康先生が、志半ばにして急逝され先生の論文《新出七寺藏『清淨法行經』攷》が遺稿となつてしまったことです。謹んで本叢書の上梓をご靈前に報告しひたすら先生のご冥福をお祈りします。

この上は本叢書の爾後第六卷までの次々の發行が順調に進捗し、廣く佛教學研究の一助となり更に今後の斯學研究の各範に益々貢獻出来ることを願って止みません。

最後に、本叢書の發刊にご盡力賜り淨業を完遂されました牧田諦亮先生、落合俊典先生はじめ七寺古逸經典研究會の諸先生方に對し、深甚なる謝意を表し衷心より厚く御禮申上げます。

七寺古逸經典研究叢書監修に當つて

牧 田 諦 亮

七寺一切經が明治三十三年（一九〇〇）四月七日付で、いわゆる國寶に指定されてから、本格的な實態調査に着手するまでには實に六十四年の歳月が経過している。昭和三十九年六月四日から始まった文化財保護委員會の七寺一切經の調査は、主任文化財調査官近藤喜博博士の指揮のもとに山本信吉（現奈良國立博物館長、大山仁快（現岡山持寶院住職）兩文部技官を中心に、昭和四十年七月、昭和四十一年九月の三回、計三週間の長さに及んだ。とくに、『尾張史料七寺一切經目錄』の編集に努力された大山仁快氏の苦辛はよく知られている。昭和四十三年九月に、「これは私たちが調査、編集したものです、漸く七寺保存會より幾部かを頂戴致しましたので、その内から一本贈呈致したいと思ひます。近藤喜博」の添書とともに、『尾張史料七寺一切經目錄』一部が郵送されてきた。七寺一切經調査の前に、京都知恩院の宋版一切經調査がやはり三ヶ年の繼續事業として行われ、私も知恩院什寶係の囑託としてこの調査の最初からかわり、田山方南氏が主任調査官で近藤喜博、山本信吉、大山仁快氏らも熱心に調査を分擔された。その緣由で、七寺の一切經目錄を寄贈されたのである。『尾張史料七寺一切經目錄』を手にして、たまたま見ひらいたところに、

大宋開寶九年丙子歲奉勅雕造 太平興國八年奉勅印（出三藏記集卷十二）

との奥書のあることを知り、うかつにも七寺一切經は印刷の宋版大藏經を底本として書き寫したものと速斷したところろに大きな誤りがあった。おそらくは知恩院での宋版一切經調査のことがわざわいしたのであろう。このころ京都大學人文科學研究所における二十餘年の共同研究の成果としての『弘明集研究』の原稿に没頭していたときであり、丹

念に七寺一切經目錄を讀むことをしなかつたのである。書庫の二階の書棚の中にならべられてしまった。それから再びこの書を手にするのは約二十年も後のことである。

私は昭和五十一年春、京都大學を定年退官の際、從來の研究所での個人研究をまとめた『疑經研究』を公刊した。中國佛教の發展に等閑視・異端視されてきた中國人撰述の經典が、實はきわめて重要な役割を果すものであることを論述したものである。このときに『尾張史料七寺一切經目錄』の内容を注意深く検討しておけば、日本における疑經の存在についてより大きな興味ある報告をなし得たことであつたと、自らの不明に恥じ入るのみである。

昭和六十年から金炳悟、直海玄哲氏等と『海東高僧傳』を讀み、さらにそのもとづいた史料としての『大唐西域求法高僧傳』を讀むこととなり、落合俊典、石橋成康、姚長壽諸氏も參加した。ことに七寺藏の大唐西域求法高僧傳に早くから關心をもつて調査していた落合氏が主動的な推進役を果たして、毎週金曜日午前十時からの研究會は續けられた。たまたま平成二年四月十一日七寺一切經中に毘羅三昧經、清淨法行經その他の疑經類の存在を落合氏から指摘された。ここに改めてさきに寄贈された目錄を検討し、法然上人が淨土宗を開いたという承安五年（一一七五）から治承四年（一一八〇）にいたる間に、尾張を中心として存在した古寫經にもとづいて書寫、地元に良き底本が求められなるときは、京都岡崎法勝寺の經本を借りて東山清水寺で寫したと奥書に記すものもふくめて、現存四、九五四卷にのぼる七寺一切經古逸經典調査という大事業が、七寺住職蟹江良三師の積極的な協力を得て發進することになった。平成二年四月に第一回の七寺藏調査の實施、また同年七月二十七日には華頂短期大學で第一回の七寺古逸經典研究會が開催されて、實質的な七寺藏平安寫一切經古逸經典の研究が徐々に進み出したのである。爾來七寺での實地調査は八回、華頂短大での研究會は九回に達したのである。この調査研究の進展に伴い、研究の成果を將來に貽すためにも、先は『毘羅三昧經』を中心とする疑經の研究を着實に實行すべきことが要求されるにいたつた。寫眞撮影を擔當した

京都北白川の光樂堂村井幸造氏の努力も特筆されるべきものがあり、その寫眞にもとづいて私たちの研究も進められた。中國佛教研究の宮井里佳、中國文學專攻の幸福香織兩氏もこれに参加して、それぞれの専門分野からの眞摯な討論が毎週金曜日の研究会でつまかさねられたのである。道教との關連で注目される清淨法行經については、正倉院文書にその名を見出すが、七寺に現存、その研究を擔當していた石橋成康氏が平成四年二月二十二日急逝したことは研究会として最大の痛恨事であった。

京都にあるイタリア東方學研究所長アントニーノ・フォルテ氏は七寺一切經研究の熱心な同志であり、同研究所の「報告」第三號として、一九九一年（平成三）十月十五日附の“THE MANUSCRIPTS OF NANATSU-DERA”とついで、落合、牧田、フォルテの報告が公刊された。また木村清孝、故石橋、落合、直海、眞柄和人らの研究報告が「華頂短期大學研究紀要」・「佛教史學研究」・「東方宗教」・「印度學佛教學研究」・「佛教文化研究」・「中外日報」その他に續々と發表されるに及んで、ひろく會員諸氏の研究を得て総合的な「七寺古逸經典研究叢書」を企畫すべきではないかとの意見がおこった。落合が企畫の中心となつて、平成五年度科學研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を申請したのである。さいわいにこの申請は採擇されて全十六卷の刊行が可能となり、その第一卷「中國撰述經典（其之一）」の公刊が決定したのである。

ところで中華民國八十一年（一九九二）七月初版として臺灣で出版された朱慶之の『佛典與中古漢語詞彙研究』は、一九九〇年度四川大學博士論文で「大陸地區博士論文叢刊十八」として大陸（中華人民共和國）の研究を臺灣で刊行するという特異なものである。漢文佛典中の言語の特徴、『中本起經』を中心としてその中に用いられる新詞・新義、また佛典と中古漢語詞彙との時代的變遷、佛典の翻譯が漢語詞彙の發展に及ぼした影響などという、從來未踏の分野への挑戦である。また梁曉虹の『小慧叢稿』（一九九二年十一月、香港亞大教育書局刊）も論佛教對漢語詞彙的影響・佛教典

籍與近代漢語口語・漢魏六朝譯經加速了漢語雙音化的過程、その他の諸論からも見られるように、經典譯出と漢語の關係に着目したものである。漢文佛教文獻に對する新しい研究分野の開拓である。七寺古逸經典の中でも、特に注目したい『毘羅三昧經』も中國人撰述經典としては最も早い時期の作品であろう。これを七寺古逸經典研究叢書中の重要文獻として採り上げたのは、翻譯佛典では中國民衆の佛教理解を得ることは困難であり、そのために民衆が理解しやすい言葉で語られた中國撰述經典の出現は當然の過程であり、それが道安の中國撰述經典の目錄Ⅱ安公疑經錄Ⅱの中に、四世紀中葉以前に作製されたと思われる二十六部三十卷として挙げられるものである。その中に毘羅三昧經二卷があり、敦煌寫經には見られないが、正倉院文書にその名が録されていて、日本への傳入は確認されるが、その經典が七寺一切經の中に蔵存していたことは驚嘆すべき歴史事實である。いまその會讀に最も大きな指導力を發揮しているのはわれわれの古くからの同志姚長壽である。彼は中國口語史研究の重要資料としてこの『毘羅三昧經』を採りあげ、また中國佛教初期の疑經の實相を知る重要な資料として以外の、より重要な毘羅三昧經の立場を認識している。日本の中國佛教研究者が気づかない、見のがした根本的な問題を指摘したものである。

ここに報告する『毘羅三昧經』に關する本文校訂譯文、註釋研究などは、まさに天下の孤本である七寺一切經古逸經典の一つであり、中國佛教研究に新たな時代を劃するような研究報告であることを確信している。

さらに諸賢の理解と援助によって、本古逸經典研究叢書の順次刊行を期するものである。

緒言

落合俊典

この度圖らずも筆者のような淺學非才の者が、『七寺古逸經典研究叢書』という大部な叢書を編集することになったが、その役の想像を絶する過重と躬らの力の無さとに毎日呻吟する羽目に陥ってしまい慚愧に絶えない。著者は、かくも貴重な七寺古逸經典の存在に目を止めた移り氣な一研究者に過ぎない。またその微力ゆえ斯界の第一人者であり、著者の恩師でもある牧田諦亮博士を會長に仰いで七寺古逸經典研究會を作り、主に事務方を努めてきただけである。

しかし、平安寫經の七寺一切經に含まれていた古逸經典の豐饒さは目を眩るものがあり、歴史の狭間に埋もれていった佛敎者たちの息遣いが耳朵に響いて來るのを止めることは出來なかつた。これらの古逸經典には、中國で撰述された經典（疑經、疑偽經）や經典の重要箇所を取り出した抄經から、四大翻譯僧の一人に數えられる鳩摩羅什の著述と傳えられる書物、また日本で撰述されたと思しき經典や未確定の大寺院の藏書目錄などが含まれていた。どれもこれも興味の盡きない新出資料である。平安寫經特有の、癖のある書法や異體字に慣れてくるに従って、それらの内容を多少なりとも把握することが出來るようになった。そうするともう研究會の事務方に徹することが苦痛になったのである。

もともと『七寺古逸經典研究叢書』の構想自體は發見當初から浮かんでいた。が、その時は夢を吐露したと言つてもいいような状態であつた。その後實際に他方面からの研究者の積極的な參加を得られたばかりでなく、出版社の好

意的な申し出に加え、文部省の出版助成まで載けて、この夢は現實となった。

『七寺古逸經典研究叢書』の編集に當たつて先ず第一に重視したことは、極力影印に努めたことである。孰れマイク
ロ化した七寺古逸經典と七寺一切經の一部は華頂短期大學圖書館に收められて公開される豫定であるが、實際の
る現物の寫眞と翻字が對になって印刷された書物は大変便利なものである。しかし擔當者にとってはこの明々白々
の提示は非常に苦しいところである。この『叢書』に参加されている東西の研究者の専門は主に中國佛教にあって日
本佛教にはあまり馴染んでいない。平安時代の院政期に書寫された七寺一切經の特殊な字體は、日本佛教を専門とす
るものにとつても相當な難關である。書の専門家から見れば全く初歩的な誤りを犯している場合もあるかも知れな
い。それを敢えて問うのはこれらの研究も何れ白日の下に晒される日が来るからである。また、躊躇しつつも刊行に
踏み切るのは、敦煌から發見された新出文獻を例に取つてもほぼ似たような經過を辿っているからである。近
年京都大學人文科學研究所より出版された『慧超往五天竺國傳研究』もすでに二十世紀の初頭に羅振玉によつて手寫
版が出、その後藤田豐八博士の詳細な研究書も刊行されている書目である。人文の研究に終わりはない。本書も同様
にこの影印翻刻を踏み臺にして將來の緻密な研究を期待したい。

※

惟うに佛教がインドの地に興起してより以來、アジア諸地域に與えた影響は計り知れないものがあるが、經典がど
のように編集され、どういう形で傳播していったか其の形態は一樣ではなかつたようである。特に佛教が漢字文化圏
に傳來した最初期については先學の勞作にも拘わらず、なお其の全體像は否として把握でき得ない。安世高などの初
期譯經が晦澁なことはもとより、客觀的な歴史資料が非常に少ないことも理由に擧げられるのであろう。

本叢書の第一卷に收載した『毘羅三昧經』は、未だ開墾されていない中國初期佛教の分野に登場した掘削機のよう

なものである。しかも中國文學や中國語學のジャンルにも多大な貢獻をするものと考える。

本書は中國佛教の分類に従えば「疑經」もしくは「疑偽經」という範疇に入る。一見して想像できるように正式の佛教經典として扱われなかったものである。しかしそれが爲にタイムカプセルの役割を果たすことになった。中國語學の上から言えばこれほど有り難い資料もないわけである。後漢・魏・晉時代の語法や文法的な諸問題を考察する上で、また特に口語的表現が豊富に残されている點で極めて重要な資料である。さらに佛傳文學や本生譚をベースとして、大乘佛教の教義を流布宣傳する目的で大膽かつ劇的な構成を練り上げた構想力は中國佛教文學の嚆矢とも言い得るのではなからうか。中國文學に關して贅言を弄する立場にないが、その見事な虚構性は充分に文學的作品として認められると確信する。

虚構性に満ちた書とはいえ、宗教的な一面を抛棄したものではない。むしろ大乘佛教の根本的思想を強調する上で用いた手法であり、その非眞實性をことさらに取り上げて文中に述べられている佛教教義まで疑う必要はない。本書は當時の佛教界を一つの方向に纏めようと試みた書とも言え、安世高系の小乘佛教の用語と支婁迦讖系の大乘佛教用語の統一を圖っている。

また本書は明らかに翻譯經典ではなく、かつその編集者に擬せられる人物の言語は漢語であつたと推定される。口語的表現が隨所に用いられていることから、さほど教養の高くない地方の知識人の手になるのではないかという見方もあるが、筆者はむしろ一般對象者を意識したために口語的表現を多用したのであり、その編集者は中國古典の素養を有する佛教に造詣の深い人物と考えている。それ故、本書は「讀む」經典と言うよりも「聞く」經典に近かつたのではなからうか。

緒

※

顧みれば、畏友永井隆正氏との語らいの場から七寺一切經四、九五四卷のなかに既に散逸してしまったと思われるいた古逸經典群の存在に気づき、以來三年の歲月が流れた。筆者にとつては昨日のこのようであるが、幸いにこの間に、恩師牧田諦亮先生、宮林昭彦先生、石上善應先生を始めとし、文化廳の元文化財専門委員の近藤喜博先生、大山仁快先生、イタリヤ國立東方學研究所所長の Antonino FORTE 先生、ナポリ大學の Silvio VITA 先生、増上寺の藤堂恭俊法主、井ノ口泰淳先生などには格別の御指導・御高配を賜った。殊に重要文化財に指定されている七寺一切經の調査をご快諾して戴いた稻園山七寺の蟹江良三住職には何度謝辭を申し上げても言い過ぎではないほどお世話になった。御住職の特別のご高配が無かつたら一步も前に進んではいなかつたであらう。

また、研究については先學同學の各位、中でも、長尾雅人先生、鎌田茂雄先生、福井文雅先生、高橋弘次先生、阿川文正先生、大谷旭雄先生、木村清孝先生、竺沙雅章先生、藤善眞澄先生、諏訪義純先生、大内文雄先生、木村宣彰先生、上横手雅敬先生、橋本高勝先生、京戸慈光先生、福原隆善先生、末木文美士先生、伊藤隆嘉先生、廣川堯敏先生等のご指導ご鞭撻を賜った。

さらには中國の楊曾文先生、姚長壽先生、方廣錫先生、王邦維先生、蘇普仁先生、韓國の金炳悟先生、米國の Jamie Hubbard 氏、Jonathan Silk 氏、英國の P. A. Herbert 女士、佛國の郭麗英先生、獨國の CRECOR PAUL 先生など諸外國の研究者からもご指導を頂いた。

日本にあつては緒方香州氏、岩松淺夫氏、眞柄和人氏、永井隆正氏、中野正明氏、本庄良文氏、榎本文雄氏、南清隆氏、榎本正明氏、村上眞瑞氏、(故)石橋成康氏、直海玄哲氏、宮井里佳氏、幸福香織氏、坂上雅翁氏、河野訓氏、北尾隆心氏、野本寛成氏、前田繁樹氏、伊吹敦氏、梯信曉氏、中野眞理子氏、伊藤誠浩氏などから種々協力を頂いた。コンピュータによる索引作成については相原良直先生にお世話になった。また、駒田彰宏氏には齣字からワープロ入

力まで積極的なご支援を賜った。氏は之に退職されてからその空いた時間を當研究會の爲に寸暇を惜しんで盡力された。目に見えない仕事ばかりであったし、これからもそうであろうが、その陰徳は稱贊しても稱贊し盡くされないのである。

七寺古逸經典の研究に當たつては各方面からの多額の援助を賜った。時間的に述べると、先ず華頂短期大學から研究助成費（平成二年度）を頂き、次いで浄土宗教學局から研究助成費（平成三年度・平成四年度）ならびに研究奨勵費（平成三年度）を頂いた。また榎本正明氏を代表として財團法人日本科學協會の笹川科學研究助成を與えられた（平成三年度・平成四年度）。さらに日本私學振興財團から平成三年度・四年度・五年度の三ヶ年間に亘つて研究助成費を頂いた。この間に木村清孝東大教授を代表として、七寺藏の『大方廣如來微妙密藏經』の基礎的研究に文部省から科學研究費（一般研究C）が出ている。名古屋の七寺における現地調査には大勢の研究者が積極的に參加され、多くは右記の研究助成に頼らずに來られている。このように調査に掛かった總經費及び延べ人數は人文分野にあつて特出していると思われるが、しかし七寺一切經の全貌を把握したとは言ひ切れない。なにぶんにも五千卷弱の經卷を調査撮影することは尋常の仕事ではなく、國家的事業と言つても過言ではない。

本叢書に収めたのは、調査撮影した數百卷の中から見いだした新出・稀覯本である。さらに現行の大藏經に入っている同名の經卷でも撮影・調査する必要があると信じられる。例えば、七寺一切經の中から偶然發見した鳩摩羅什譯『馬鳴菩薩傳』などは現行の底本となつた高麗版はもとより宋元明のどの版の同名書とも一致しない。そればかりでなく、七寺本の『馬鳴菩薩傳』こそが隋唐佛教で正式に入藏されていた經本であることが實證された。將來的には日本に現存する古寫經を集大成し一大叢書を刊行すべきであろう。